

保育実習の経験が学生の自己成長に与える  
影響に関する研究  
——実習後の自己評価票に着目して——

A Study on the Influence of Childcare Practicum  
Experience on Students' Sense of Self-Growth:  
Focusing on the Self-Evaluation Form after Practical Training

泊 明希佳  
Akika Tomari

第1章 はじめに

保育職を目指す学生（以下「学生」）にとって実習は、子どもと実際に関わることで子ども理解を深める重要な機会となる。そして、現場での実習は保育士養成校（以下「養成校」）で学んだ保育に関するさまざまな知識を確認したり技術を実践したりする大切な機会でもある<sup>1)</sup>。また、林ら（2016）は、実習での経験は保育者として仕事をしたいかどうかを判断する貴重な機会にもなるとし、学生は実習を通して自分自身が保育士として仕事をしていけるのかを判断していると述べている<sup>2)</sup>。さらに、実習体験の積み重ねにより、保育や支援にあたっての個別的、総合的な予測、判断、決断と実行、責任の自覚、自己評価の意義を把握し、保育士としての成長の実感を伴う経験をもつことができる<sup>3)</sup>。

しかし、学生は実習において戸惑いや困難を感じる場合もある。片岡（2020）は、学生が実習中に経験する困難は、学習意欲の低下や保育者としての自信を失うなどの問題につながることもあると指摘している<sup>4)</sup>。谷川（2010）は実習中に経験する困難は、保育士としての成長の契機になる場合があるものの、その後の学習意欲の減退につながる可能性を指摘している<sup>5)</sup>。さらに、林ら（2016）は実習でつまづいた学生が保育職以外を選択する場合があるとし、実習までに学生が自信をもって実習に臨めるようになるまでの指導が必要であると述べている<sup>2)</sup>。

そのため、学生の実習での学びや課題を整理し、その後の実習や学習意欲へとつなげていくことができるような実習事前事後の指導を行うことは、実習指導教員にとって喫緊の課題であるといえよう。そこで本論文では、前述した実習体験の積み重ねが保育士としての成長の実感を伴う経験に

つながるという点も踏まえ、実習の経験が学生の自己成長に与える影響について検討することを研究の目的とする。そして、実習事前・事後指導への一助にしたいと考える。なお、筆者自身は保育実習指導を担当する教員であることから、本論文では保育実習を研究の対象とする。

本論文の構成は以下のとおりである。まず、保育所と施設での保育実習について述べる。次に、学生の自己評価票をもとに保育実習の経験について整理し、学生の自己成長との関連を検討する。最後に全体考察を行い、今後の展望について述べる。

## 第2章 保育所と施設での保育実習

### 保育実習

現在、養成校にとって最も大きな影響を与えているものとして『保育実習指導のミニマムスタンダード』が挙げられるが、『保育実習指導のミニマムスタンダード』作成以前にも「保育実習」をテーマにした課題研究は行われており、養成校における実習の重要性について検討されてきている<sup>6)</sup>。

一般社団法人全国保育士養成協議会専門委員会(2015)は、保育実習指導の在り方を他職種の専門職養成から実習指導に重点を置いて比較することで、浮かび上がる課題を確認するとともに、保育士養成における実習システムの特徴を明らかにすることを目的に研究を行っている<sup>6)</sup>。その結果、保育実習Ⅰ(保育所と施設)で1回目の実習を経験し、その後の実習指導を踏まえて、再度、同様の実習施設で保育実習Ⅱ(保育所)、もしくは保育実習Ⅲ(施設)の連続的・発展的な実習を行うという「実習の連続性」による学生の成長を保障する実習プログラムであると述べている<sup>6)</sup>。また、保育実習Ⅰ(保育所と施設)とは異なる実習施設で保育実習Ⅱ(保育所)、もしくは保育実習Ⅲ(施設)を行うことも可能であり、保育所の多様さや、施設実習の多様さを学生が体験することができるという「実習の多様性」を重視することも可能であるとしている<sup>6)</sup>。

表1は筆者の勤務する保育士養成校(以下「本校」)で実施されている実習を示したものであるが、表1で示しているように、本校では2年間の在学期間中に、保育所、幼稚園、保育所以外の福祉施設(以下施設)といった異なる実習先での実習が行われる。前述したが、本論文は保育実習を研究の対象としており、表1で示しているように保育実習は、保育所と施設の両方で実施される。したがって、学生は保育所と施設の両方での実習を経験することになる。

表1 本校における実習

学年	実習の種類	実習先
1	保育実習Ⅰ(保育所)	保育所
	幼稚園教育実習①	幼稚園
	幼稚園教育実習②	幼稚園
2	保育実習Ⅰ(施設)	保育所以外の福祉施設
	保育実習Ⅱ(保育所)または 保育実習Ⅲ(施設)	保育所、または保育所以外の福祉施設

## 保育実習での経験

実習を通じた学生の成長感をめぐる研究には、実習担当教員および非実習担当教員が学生の成長をどのように捉えているのかについて検討したものが<sup>6)</sup>ある。その結果、学生自身の肯定的感覚や達成感を学生の成長として捉えるのではなく、学生が感じる不安など否定的感覚をも、学生の成長の一側面として捉えていることを明らかにしている。さらに、教員は実習における学生の成長を実習の達成度という結果のみから捉えるのではなく、学生を成長過程の一時点にいる存在として捉えていることを明らかにし、実習中において何かしらの困難との遭遇も成長の兆しとして受け取っている可能性があるとしている。

石川（2019）は、学生が実習中において遭遇する困難として喧嘩やいざこざといった対人葛藤場面に着目し、学生にとっては対応に戸惑いを覚えることが多い出来事であると述べている<sup>7)</sup>。さらに、喧嘩やいざこざは解決を要する課題であり、学生自身の保育力を試される機会と感じられることも含まれるため、学生にとって生じないほうがよい場面として回避されがちであると石川（2019）は述べている<sup>7)</sup>。その一方で、喧嘩やいざこざには成長の契機が含まれており、学生自身の保育力をつける上でも、喧嘩やいざこざに向き合うことが望まれていると石川（2019）は述べている<sup>7)</sup>。

以上を踏まえると、学生の自己成長には達成感という肯定的感覚と、不安などの否定的感覚の二つの側面があることが考えられる。また、実習中に困難と遭遇するという経験は学生の自己成長に影響を与える可能性も示唆している。そこで、以下では保育所と施設での実習における困難について述べていく。

### 1) 保育所での実習の困難

ここでは保育所での実習における困難について先行研究をもとに述べていく。片岡（2020）は、学生が実習中に体験する困難に着目し「子どもへの指導」「子どもとのかかわり」「子ども同士のトラブル」「支援を要する子ども」「実習生への攻撃や暴言」「子どものケガ」「子どもの体調不良」「(実習先での) 教員との関係」の8つのカテゴリーを示している<sup>4)</sup>。

また、林ら（2016）は学生から得られた実習での子どもとのかかわりにおいてうまくいかなかったエピソードを分析し、その結果「コミュニケーションの取り方」「喧嘩の仲裁」「注意を必要とする場面での対応」「遊びの調整」「実習生の取り合いになった時の対応」「人見知りをする子どもとのかかわり」「着替え場面での対応」「障害のある（あるかもしれない）子どもとのかかわり」「ママがいいと泣く子どもとのかかわり」「子どもの行動の意味を理解すること」「子どもに注目してもらうこと」「無理な要求への対応」「その他」の13のカテゴリーを示している<sup>2)</sup>。

加藤（2017）は、実習での困難場面における保育方法に関する記述内容をもとに質的検討を行っている<sup>8)</sup>。その結果、「子ども同士のトラブルへの対応」「子どもの気になる行動への対応」「実習生としての対応の難しさ」「その他」の4つのカテゴリーを示している<sup>8)</sup>。

以上のことから学生は保育所での実習において、子どもとの関わりについて戸惑っていることが考えられる。「着替え場面での対応」に着目すると、着替えの対応には子どもの発達の理解と着替えの手伝いや言葉かけといった具体的な援助方法への理解が必要であると考えられる。そのため、子

どもとの関わりにおいては、子ども理解を深めることが重要であるということが窺える。

## 2) 施設での実習の困難

ここでは施設での実習における困難について先行研究をもとに述べていくが、まず保育士養成課程における施設実習の現状についても触れておきたい。大和田ら (2014) は、実習事前指導や施設実習に関わる面接指導で「なぜ、保育士になるのに施設へ実習に行かなくてはならないのか」「施設実習の意味が分からない」「施設には行きたくない」などの否定的な感情を含む意見が聞かれる現状があると述べている<sup>9)</sup>。さらに大和田ら (2014) は、障害系施設に配属された学生は養護系施設に配属された学生よりも、不安や戸惑いが多いことを指摘している<sup>9)</sup>。貴田ら (2012) は、保育士を目指す学生にとって意義を見いだしかねるものとなっているとし、学生の将来につなげられる有意義な体験とするために実習事前指導が重要であるとしている<sup>10)</sup>。その反面、施設での実習を入所施設という生活の場で実習し、そこで生活する子どもや利用者、職員との出会いや直接的な体験を通して施設保育士を認識し、就職へとつながるきっかけとなる学生が増加してきた現状もある<sup>10)</sup>。

藤田 (2016) は、児童養護施設の実習を経験した学生を対象に調査を行った結果、「遊びが激しく体力がいる」「試し行動」「言葉かけの難しさ (質問に対する返答やタイミング)」「同年代の児童との関わり方」「良くない行動に対する対応」「喧嘩の仲裁」「泣いているときの対応」「性教育」「何らかの障害 (発達障害) がある児童との関わり」「職員が忙しくしており質問ができない」を実習中の困難として挙げている<sup>11)</sup>。

石田ら (2019) は、障害児者福祉施設での施設実習において保育士養成課程の施設実習の目的がどの程度達成できているのかについて検討した結果、利用児者のニーズや支援計画、地域や家庭との連携、施設職員の職業倫理などについては、深く理解するまでには至っていないことを明らかにしている<sup>12)</sup>。

以上のことから、学生は施設での実習を行う前の段階で、施設での実習に対して否定的な感情を抱いていることが窺える。入江ら (2014) は、実習事前指導において学生同士が話し合い、悩みを共有し、その解決に向けて協力することが不安の低減化につながるとし、養成校はその機会を提供することが重要であるとしている<sup>13)</sup>。特に、施設の実習に関しては、前述したように障害系施設と養護系施設での困難がそれぞれ異なることも踏まえた上での施設や施設保育士への理解が必要である。

## 第3章 保育実習の経験と学生の自己成長

### 本章における質的分析の視点と方法

この章では、保育実習の経験が学生の自己成長に与える影響について検討していくために、保育実習での経験による学生の変化に着目していく。そのために20XX年度に本校2年生に在籍していた学生が、保育実習Ⅰ (施設) と、保育実習Ⅱ (保育所)・保育実習Ⅲ (施設) を終えたあとに記入した自己評価票をもとに質的分析を行う。この自己評価票は、それぞれの実習を終えた時期である20XX年度の8月初旬と、11月中旬に書かれたものである。図1は、2年生の保育実習Ⅱ (保育所)

または保育実習Ⅲ（施設）の実施状況について示したものである。保育実習Ⅰ（施設）を終えた学生は、保育実習Ⅱ（保育所）または保育実習Ⅲ（施設）のどちらかを選択する。20XX年度は保育実習Ⅱ（保育所）を選択した学生は19名、保育実習Ⅲ（施設）を選択した学生は12名であった。そのうち、コロナ等の影響を受けずに図1で示した期間でそれぞれの実習を終えた学生は、保育実習Ⅱ（保育所）12名、保育実習Ⅲ（施設）7名であった。そこで、本論文ではこの保育実習Ⅱ（保育所）12名と保育実習Ⅲ（施設）9名が記入した自己評価票を分析の対象とした。

なお、本論文でデータとして使用した自己評価票は、実習先が学生に対する評価を記入する評価票と同じ様式のものを使用している。したがって、本論文でデータとして使用する自己評価票は研究計画にもとづいて作られたものではないものの、保育実習Ⅰ（施設）と保育実習Ⅱ（保育所）・保育実習Ⅲ（施設）を終えた直後の実習事後指導で書かれたものであり、学生の率直な感想が記述されていることが予想されたため、本論文の研究の目的に敵うデータであると判断した。対象とした学生の自己評価票は、所見欄の記述内容をテキストファイル化してデータとして使用し、質的分析ができるようKHコーダーを用いたテキストマイニングを行った。また、保育実習の経験による学生の変化に関する語の抽出ができるよう、保育実習Ⅰ（施設）と保育実習Ⅱ（保育所）・保育実習Ⅲ（施設）を「実習経験の積み重ねによる学生の変化」として比較し、得られた結果をもとに考察を行った。さらに、保育実習Ⅰ（施設）を経て保育実習Ⅱ（保育所）、または保育実習Ⅲ（施設）を選択した学生について「実習の多様性による学生の変化」として比較し、得られた結果をもとに考察を行った。

倫理的配慮として、20XX年度本学2年生に在籍の学生に対しては、プライバシーへの配慮を十分行うことを伝え、自己評価票をデータとして使用することの了承を得た。

#### KHコーダーによる分析結果と考察

保育実習の経験による学生の変化について検討するために、抽出語リスト作成機能を用いて「名詞」「サ変名詞」の上位10語を示した。前述したが、学生の自己成長には達成感・不安といった感覚と困難という経験が影響を与えている可能性があると考えられ、達成感・不安といった感覚や困難の経験は心情・感情との関連性が強いことが考えられる。「名詞」「サ変名詞」には心情・感情に関する語の頻出が確認されることが予想されたため、本論文では「名詞」「サ変名詞」に着目すること

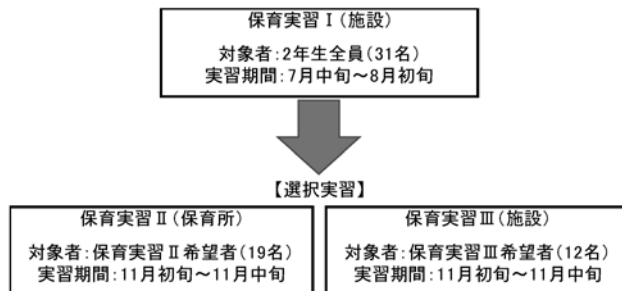


図1 20XX年度の保育実習の実施状況

にした。また、否定的感覚も学生の自己成長の側面であると考えられるため、もとの文章から語の文脈の確認を行った。

1) 実習経験の積み重ねによる学生の変化

表2は、保育実習Ⅰ（施設）と保育実習Ⅱ（保育所）・保育実習Ⅲ（施設）を、実習経験の積み重ねという観点で比較したものである。表2によると、保育実習Ⅰ（施設）、保育実習Ⅱ（保育所）・保育実習Ⅲ（施設）の「名詞」では、「子ども」が多く頻出していた。保育実習Ⅰ（施設）では「最初」が上位の語であったが、保育実習Ⅱ（保育所）・保育実習Ⅲ（施設）ではみられなくなっていることから、学生が保育実習Ⅰ（施設）の経験を経て、初めての施設実習への不安が解消されていることが窺える。保育実習Ⅰ（施設）では「サ変名詞」の上位に「緊張」という心情的な語が頻出していることに対して、保育実習Ⅱ（保育所）・保育実習Ⅲ（施設）では「援助」「指導」「対応」という語が頻出している。このことは、保育実習Ⅰ（施設）の経験を経て、子どもや利用者との関わりの深まりと、保育（養護）技術の学びが読み取れる。

表2 保育実習Ⅰ（施設）を経験した後と保育実習Ⅱ（保育所）・保育実習Ⅲ（施設）を経験した後の学生の変化

順位	保育実習Ⅰ		保育実習Ⅱ・Ⅲ		保育実習Ⅰ		保育実習Ⅱ・Ⅲ	
	名詞	出現回数	名詞	出現回数	サ変名詞	出現回数	サ変名詞	出現回数
1	子ども	13	子ども	15	実習	13	保育	13
2	職員	5	積極	7	施設	8	実習	9
3	最初	4	言葉	6	イメージ	5	利用	6
4	自分	4	自分	5	緊張	3	援助	5
5	積極	4	関わり	4	行動	3	活動	5
6	乳児	3	気持ち	4	支援	3	指導	4
7	幼稚園	3	課題	3	保育	3	対応	4
8	関わり	2	職員	2	利用	3	意識	3
9	言葉	2	段階	2	実践	2	施設	3
10	初日	2	年齢	2	理解	2	設定	3

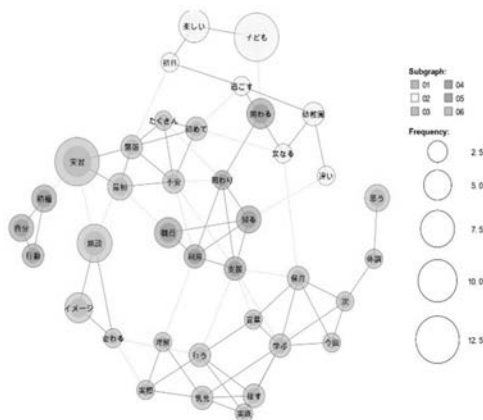


図2 保育実習Ⅰ（施設）の全抽出語の共起ネットワーク

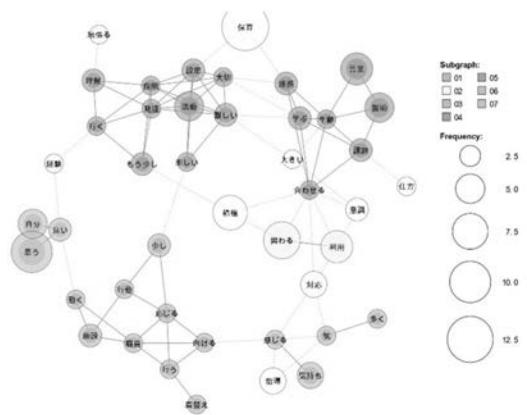


図3 保育実習Ⅱ（保育所）と保育実習Ⅲ（施設）の全抽出語の共起ネットワーク

図2と図3は保育実習Ⅰ（施設）と保育実習Ⅱ（保育所）・保育実習Ⅲ（施設）の全抽出語に関する共起ネットワークである。図2を見ると、名詞の抽出語リスト上位の「子ども」は、「関わり」と共起している。また、「実習」と「施設」との共起関係からは、施設での実習に対する不安や緊張が窺える。そして「施設」は「イメージ」とも共起しており、実習の経験により施設に対するイメージが変化したことが窺える。

2) 実習の多様性による学生の変化

表3は、保育実習Ⅰ（施設）・保育実習Ⅱ（保育所）と保育実習Ⅰ（施設）・保育実習Ⅲ（施設）を、実習の多様性という観点で比較したものである。図4と図5は保育実習Ⅰ（施設）・保育実習Ⅱ（保育所）と保育実習Ⅰ（施設）・保育実習Ⅲ（施設）の全抽出語に関する共起ネットワークである。

表3の抽出語リスト「名詞」では、「子ども」が多く頻出していた。図4では「子ども」と「関わる」「楽しい」が共起している。抽出語リストの「名詞」の「職員」に着目すると、頻出回数に変化が見られた。図5では「職員」は「知る」と共起している。もとの文章から文脈の確認を行ったと

表3 「実習の連続性」と「実習の多様性」における学生の変化の比較

順位	保育実習Ⅰ・Ⅱ		保育実習Ⅰ・Ⅲ		保育実習Ⅰ・Ⅱ		保育実習Ⅰ・Ⅲ	
	名詞	出現回数	名詞	出現回数	サ変名詞	出現回数	サ変名詞	出現回数
1	子ども	25	子ども	17	実習	18	保育	13
2	自分	9	職員	7	施設	11	実習	9
3	積極	9	積極	6	利用	9	利用	6
4	言葉	8	関わり	4	保育	6	援助	5
5	関わり	5	最初	4	イメージ	5	活動	5
6	職員	5	自分	4	行動	5	指導	4
7	最初	4	乳児	3	対応	5	対応	4
8	気持ち	3	幼稚園	3	緊張	3	意識	3
9	乳児	3	言葉	2	指導	3	施設	3
10	幼稚園	3	初日	2	支援	3	設定	3

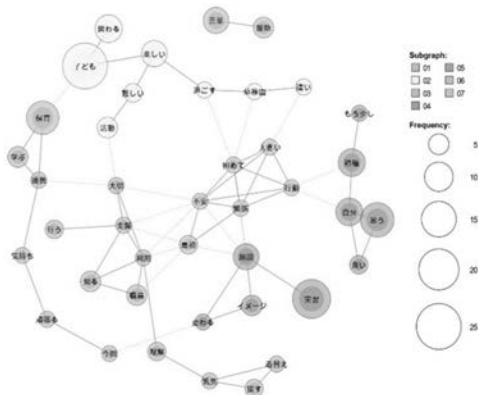


図4 保育実習Ⅰ（施設）と保育実習Ⅱ（保育所）の全抽出語の共起ネットワーク

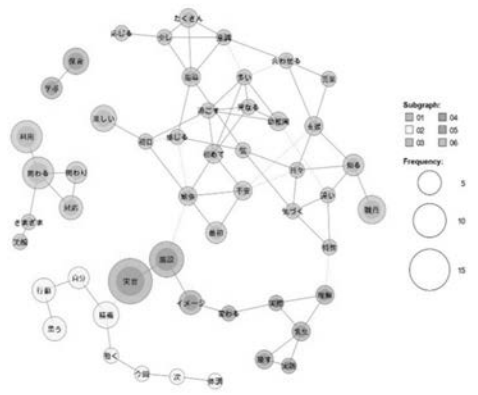


図5 保育実習Ⅰ（施設）と保育実習Ⅲ（施設）の全抽出語の共起ネットワーク

ころ、職員との関わりや職員の業務に関する記述が確認された。このことから施設での実習を経験したことによる施設へのイメージの変化が、職員との関わりにも影響したことが考えられる。

#### 第4章 総合考察

本論文では実習の経験が学生の自己成長に与える影響について検討することを目的に研究を行った。その結果、保育実習の経験は学生の自己成長に影響を与えることが明らかになった。また、実習経験の積み重ねによる学生の変化と、実習の多様性による学生の変化について検討した。その結果、実習経験の積み重ねは学生に影響していること、施設へのイメージの変化は職員との関わりにも良い影響を与えることが明らかになった。このことは、実習前の段階で施設へのイメージが変化することが、実習での学びへと影響することを示唆している。

しかし、今回の研究では実習事前指導の方法については言及していない。したがって、今後は多角的な視点からの保育実習の経験による学生の自己成長に関する研究が望まれる。

#### 引用文献

- 1) 本村弥寿子. (2021). 保育実習生に求められる力について－保育実習評価票から探る－：長崎女子短期大学紀要第46号, 69-73.
- 2) 林 幹士・田中麻紀子. (2016). 保育実習で学生が子どもとのかかわりでうまくいかなかったことは何か－保育実習ⅠAにおけるエピソード記述の分析から－：夙川学院短期大学教育実践研究紀要第10号, 70-80.
- 3) 一般社団法人全国保育士養成協議会. (2018). 保育実習指導のミニマムスタンダード Ver.2「協働」する保育士養成：中央法規出版株式会社.
- 4) 片岡 祥. (2020). 保育職を目指す学生が実習中に体験する困難の内容：滋賀文教大学紀要第22号, 83-92.
- 5) 谷川夏実. (2010). 幼稚園実習におけるリアリティ・ショックと保育に関する認識の変容：『保育学研究』第48巻第2号, 96-106.
- 6) 一般社団法人全国保育士養成協議会専門委員会. (2015). 平成26年度専門委員会課題研究報告書学生の自己成長感を保障する保育実習指導のあり方－保育実習指導Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを中心に－：一般社団法人全国保育士養成協議会.
- 7) 石川由香里. (2019). いざごぎについて問題完結方略の発達と保育者の介入－実習経験とつながる保育内容「人間関係」指導法－：『活水論文集』第62集, 95-107.
- 8) 加藤由美. (2017). 実習生や若手保育者の困難場面における保育方法についての一考察：新見公立大学紀要第38巻, 97-102.
- 9) 大和田明見・関根美保子・鈴木春江. (2014). 保育士養成課程における施設実習の意味と意識の変化：帝京大学教育学部紀要2, 275-284.
- 10) 貴田美鈴・谷口 篤. (2012). 保育実習（施設）の事前指導と実習後の学生の意識－実習の期待感と不安感、及び実習成果の自己評価－：岡崎女子短期大学研究紀要45号, 21-28.



- 11) 藤田 了. (2016). 保育士養成課程における施設実習の課題に関する一考察－学生のアンケート調査を通じて－：奈良保育学院研究紀要第17号, 103-111.
- 12) 石田慎二・西村真実. (2019). 保育士養成課程における施設実習の現状と課題 (2)：帝塚山大学教育学部紀要第1号, 1-8.
- 13) 入江和夫・福地昭輝・入江三津子. (2014). 学生の保育実習不安と自立感：山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第38号, 21-28.

## 謝 辞

本論文の執筆にあたり、自己評価票を用いることについて、学生の許諾を得ることができたことに感謝を記す。

